

旧跡・渡船場表示板

平成17年3月

大正区役所

はじめに

当区は、昔、姫島（今の三軒家地域）と呼ばれていましたが、後に豊臣家より、この島に港などの整備を行った中村勘助にちなんで「勘助島」という名が与えられました。江戸時代には泉尾新田や岡島新田などの町人請負新田が開発され、明治時代以降も大阪築港計画による鶴町や船町などの埋め立てが行われました。そして大正末期頃、現在の区域がほぼ確定しました。

区の周りを流れる木津川と尻無川は、江戸時代、大坂の経済を支える大動脈として諸国の船で賑わい、明治時代以降は紡績工場や造船所などがつぎつぎと建設され、阪神工業地帯の中核地域として発展しました。

大阪市の第一次市域拡張時（明治30年）に市域に編入され、西区、港区を経て、昭和7年10月1日に大正区が発足しました。

区名は区の北端にある「大正橋」にちなんでいます。

当区には、川と海に囲まれた地勢から、古くから市民に親しまれてきたいわば「水都大阪の風物詩」といえる「渡し」が7ヶ所あります。生活上の利用に加えて、近年、ひとときのいやしを求め、水辺の風情を楽しむ人々の姿も多く見られます。

今回、より一層大正区の成り立ちなどを知っていただくために、区内の歴史等を調査し、広く区民の方々にその内容を紹介するため、渡船場も含め、区内の名所旧跡（新田・町名由来など）を示したパネルを区内21ヶ所に設置しました。

この機会に区内の名所・旧跡や渡船場を訪ねてみませんか。

平成17年3月
大正区役所

わがまち大正



旧跡・渡船場表示板一覧

種類	パネルタイトル	取付場所
旧跡 パネル	①御船藏跡	岩崎橋公園内
	②木津川口遠見番所跡	大正橋公園内
	③尻無川	泉尾2公園内
	④三軒家	三軒家公園内
	⑤近代紡績工業発祥の地(大阪紡績)	
	⑥難波島	三軒家東2-11内
	⑦泉尾新田	泉尾公園内
	⑧北恩加島	北村公園内
	⑨昭和山	千島公園内
	⑩小林	小林公園内
	⑪平尾	平尾公園内
	⑫南恩加島	南恩加島公園内
	⑬鶴町	鶴町中央公園内
渡船場 パネル	A 落合上渡船場	落合上渡し
	B 落合下渡船場	落合下渡し
	C 千本松渡船場	千本松渡し
	D 船町渡船場	船町渡し
	E 千歳渡船場	千歳渡し(北恩加島2丁目側)
	F	千歳渡し(鶴町側)
	G 甚兵衛渡船場	甚兵衛渡し
	H 木津川渡船場	木津川渡し

おふなぐらあと 御船蔵跡

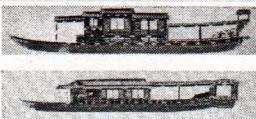
三軒家地域は、豊臣時代から開発者の中村(木津)勘助の名前をとって、勘助島と呼ばれていました。江戸時代には「御船蔵」と「木津川口遠見番所」が設けられ、御船蔵は岩崎橋公園附近(現在地)、番所は大正橋公園附近(現在地の東方)にありました。

「御船蔵」は幕府の官船等を納める施設で、文書や地図にも記録されています。当地の御船蔵が藏した官船名は明らかではありませんが、幕府の「川御座船」には紀伊国丸や土佐丸等の名前が見られ、漆塗りの屋形を持ち、金銅の金具をつけて豪華な装飾を施され、櫓と棹で航行する川船でした。明治23年発行の大坂実測図にも跡地に「字船屋舎」の文字が見えます。大正9年に開削された岩崎運河にも敷地の一部が取り込まれました。

なお、公園北側の環状線の擁壁面には、「昭和3年の道路開通記念碑」が埋め込まれています。



大正区の花「つつじ」



大阪市

（出典）『大坂実測図』（明治23年）（大坂市立歴史博物館蔵）

① 岩崎橋公園内

きづかわぐち とおみばんしょあと 木津川口遠見番所跡

木津川は大阪の経済を支える大動脈として諸国の船の出入りで賑わいました。当地は、昔、「姫島」と呼ばれておりましたが、義民として名高い中村(木津)勘助が、慶長15年(1610年)に豊臣家のために軍船係船所の建設や船着場の整備等を行い、その功により「勘助島」と名付けられました。

江戸時代になって、幕府は宝永5年(1708年)に「木津川口遠見番所」を現在地に設けました。また、西方には幕府の官船等を収容する「御船蔵」(岩崎橋公園附近)がありました。

大阪の島と言われた当地と都心をつなぐルートとして、大正4年(1915年)市電開通とともに架けられた大正橋は、当時わが国最長のアーチ橋で、当区名の由来ともなっています。新橋が昭和49年に完成、下流側の高欄には、ベートーベンの交響曲第9番「歓喜の歌」の楽譜がデザインされています。

なお橋の東側にある「安政津波遭難者供養碑」は、安政元年(1854年)に木津川一帯を襲った安政の大津波の惨状を述べるとともに、最後に「後人の心得…願わくば心あらん人、年々文字読み安きよう墨を入れ給うべし」と記しており、大阪人の心情を表しています。



大正区の花「つつじ」



大阪市

（出典）『おがまち大正』より

② 大正橋公園内

しりなしがわ 尻無川

江戸時代、尻無川は今の大阪ドームの場所を通り、西区江之子島まで達していましたが、大坂市中の遊興の地であり、文久3年(1863年)の「浪華の賑ひ」によれば「此堤に黄櫨多く列なれり。紅葉の頃は錦色川水に映じせん望(遠く見渡すこと)又類ひなし。又春弥生の潮干には蛤、蜆を取らんとして来る人夥し」とあります。

また、摂津名所図会にも鯛釣を楽しむ人々の姿が活き活きと描かれている絵があります。

また、尻無川は、「唐人澤」とも呼ばれ、朝鮮通信使の通る水路ともなっていました。

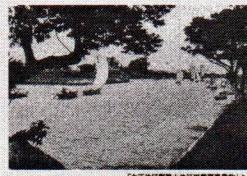
これは、尻無川には幕府の御番所や御船藏があつたためです。

宝暦14年(1764年)の第11回の際には塩飽島(香川県)の水主3,500人の加勢を得て紀伊国丸等の幕府の船や諸侯の川御座船が黄金張りで華麗な屋形を設け尻無川の河口から上陸地点の北浜までの川筋を遡る姿を、人々は川の両岸に詰めかけ見学したようです。



大正区の花「つづじ」

大阪市



「大正区御井土池区御井寺寺前」より

③ 泉尾2公園内

さんげんや 三軒家

延宝3年(1675年)に出された、大坂の名所案内書である「芦分船」によると家数の少なさから「三軒屋」と名付けられた当地も「次第に人家が満々、軒をならべ繁栄して、旅泊の船出入繁く」としており、「芦分船」が発行される少し前の明暦3年(1657年)には当地での「川口遊里」が禁止されるまでになっています。

貞享元年(1684年)に天満組替地となり、当地の一部は大坂三郷に入りました。幕府の「木津川口遠見番所」や「御船藏」が置かれ、摂津名所図会にも「千石・二千石の大船、水上に町小路を作りたる如く舳先には船の名、家々の紋付けて其國をしらせ、風威の順不同・潮時の満干を考えて出帆あり着船あり」とし、薩摩(現鹿児島県)・日向(現宮崎県)船の着船の記録も見えます。北国航路の和船係留地であった木津川には和船が1000艘以上にもなったので、明治14年(1881年)には三軒家川を開削、「船囲い場(178,000m²)」を現在の三軒家東3丁目に開設しました。その名残りが今もあります。

(江戸時代には「三軒家」は「三軒屋」と表記されることが多かった。)



大正区の花「つづじ」

大阪市



大阪市パノラマ地図(大正13年)より

④ 三軒家公園内

きんだいぼうせきこうぎょうはっしょうのち おおさかぼうせき 近代紡績工業発祥の地（大阪紡績）

明治16年7月に、東京・大阪の実業財界人渋沢栄一や藤田伝三郎らが出資した大阪紡績会社（通称：三軒家紡績）が、当地「三軒家村」で操業を始めました。この大阪紡績会社は大正区の近代工業を飛躍的に発展させ、大阪の紡績業を日本一に押し上げる原動力となりました。

三軒家村は古くから船着場としてにぎわい、石炭や原料の綿花の搬入や製品の運搬に便利なため選ばれたといわれています。

操業間もなく夜業を始めましたが、明治19年に発電機を購入し、初めてあかあかと電灯がともり工場全体が不夜城のように浮かびあがり、各地から電灯の見学者が殺到しました。工場はまたたく間に拡大発展し、業界に傑出した地歩を確立しました。

明治20年代には、当地を中心とした数多くの紡績、繊維会社ができ、日清戦争から日露戦争時代にかけて大阪は「東洋のマン彻スター」と呼ばれるにふさわしい発展をとげました。

その後、大正3年、昭和6年に他社と合併して世界最大の紡績会社に発展しましたが、戦争激化とともに軍需工場に転換させられ、昭和20年3月の大空襲で焼失しました。



大阪市



⑤ 三軒家公園内

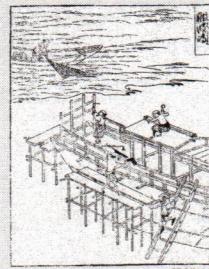
なんばじま 難波島

江戸初期の名所案内書である「芦分船」によれば、「（難波島は）難波につづきたる所也。昔日難波の住人ひらきし所なれば此島の名とするにや」とあり、挿絵として船造りの風景を載せています。その後、元禄12年（1699年）に木津川の流路を一直線にするため河村瑞賢により島の中央部が開削され難波島は東西に分れ、東側を「月正島」（浪速区）と呼び、西側を「難波島」と言うようになりました。「攝津名所図会大成」には「此地船大工職多く常に海舶を作事す」とあります。木津川交通の要衝として発展し、当地には加賀（現石川県）国等の船宿が見られ、北前船が着船し、二十石積の上荷船が86艘あったとされます。

難波島の西側の三軒家川は一部埋め立てられ、百濟橋は廃橋になりましたが、橋の一部は隣に残されています。大正中期には造船所15社が集中し、現在も工場群となっています。島の南端には「木津川防潮水門」と「三軒家水門」があり、防災拠点となっています。



大阪市



⑥ 三軒家東 2-11 内

いずおしんでん 泉尾新田

元禄15年(1702年)に検地を受けた「泉尾新田」は和泉国堺尾村の北村六右衛門が元禄11年(1698年)に開発に着手し、もとは三軒家浦新田と称していましたが検地を受ける時に、北村氏の出身の国名と村名から一字づつをとり「泉尾新田」と名付けました。二重の堤をめぐらし、沖堤は尻無川と三軒家を結ぶ、高さ9mの堤防で、現在の尻無川防潮水門から北村公園(一部、今でも堤跡の斜行道路が見られます)の北側を通り、千島バス停を越え、泉尾東小学校の南側を通っていました。中堤は泉尾工業高校の北側を通り泉尾東小学校まで、高さ5.4mの堤防で、沖堤と中堤の間は水田、中堤の中は畑でした。

面積は、明治初期にはその後の開発も併せて125町の大新田となりました。新田内は「井路」と呼ばれる用水路が縦横にめぐらされ、かんがいや排水、舟運による運搬路となりました。

宅地は尻無川沿い(北泉尾)と三軒家村西側(南泉尾)の2ヶ所45戸だけで、縦溝たる農地が広がっていました。作物は棉と西瓜が良く獲れました。

また、新田の事務を行うために、南泉尾(現在の三軒家東5丁目附近)に瓦葺の立派な「会所」を置きました。

明治時代になり北村六右衛門が破産処分を受け、負債償却を目的に設立された土地会社の所有になりました。



大正区の花「つつじ」

大阪市



⑦ 泉尾公園内

きたおかじま 北恩加島

恩加島新田は、東成郡千林村(現旭区)の岡島嘉平次が、木津川と尻無川の間の浅州の干拓に着目し、文政12年(1829年)に検地を受けました。名称は当時の代官岸本武太夫の命で、「岡島」を「恩加島」と換用したものです。

恩加島新田のうち北側が「北恩加島新田」、南側が「南恩加島新田」となりました。北村公園の「北村」は、泉尾新田の開発者「北村六右衛門」に由来しています。

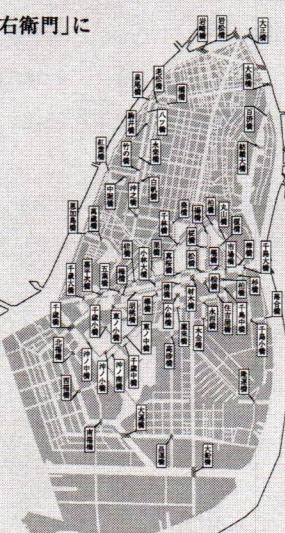
《大正区の思い出の橋》

大正区の区域は新田開発により成り立っているため、運河や用水路がいたるところに張り巡らされていましたが、区画整理事業などで、そのほとんどが消滅しました。区内中央部の運河周辺に特に多かったので、その昔の橋の名前だけでも残したいと右の図にその一部を紹介します。



大正区の花「つつじ」

大阪市



昭和36年頃の大正区

⑧ 北村公園内

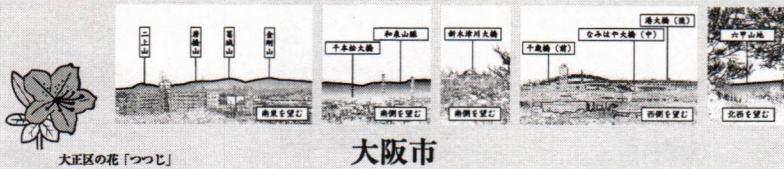
しょうわざん 昭和山

ちしま ひがしなり せんばやし おかじまかへいじ
千島新田は、東成郡千林村（現旭区）の岡島嘉平次により、明和5年（1786年）から順次開発されました。地名は千林村の「千」と、姓の岡島の「島」をつなぎ合わせて「千島新田」と命名されました。

大正時代の千島町一帯は、西区から移転してきた木材業者により、関西随一の木材市場となり、木材の集積のため、木津川と尻無川を結ぶ大正運河（延長1,963m・幅45m）が大正12年に完成しました。住之江区の平林貯木場へ移転するまで、この運河を中心に貯木池として利用されていました。

昭和44年9月に発表された「千島計画」は、区のほぼ中央、もと大正運河や貯木池のあった千島町一帯に「港の見える丘」を造るという大規模な計画でした。この人工の山は地下鉄工事の残土など、約170万立方メートル（ダンプカー57万台）の土砂で造られ、標高33mで「昭和山」と命名されました。

ろっこう にじょう かつらぎ こんごう いづみ
千島公園（11.2ha）の中心に位置するその頂上からは、六甲や二上、葛城、金剛、和泉の山並みとともに港大橋、みなみはや大橋、千歳橋、新木津川大橋、千本松大橋などが眺められ、麓には「せせらぎ」も整備され、その恵まれた自然は区民の憩いの場となっています。



大阪市

⑨ 千島公園内

こばやし 小林

ひがしなり せんばやし おかじまかへいじ
小林新田の由来は、東成郡千林村（現旭区）の「岡島嘉平次」が開発し、天保3年（1832年）に検地を受け、出身地の千林村の「林」をとて「小林」と名付けたものです。

戦前、当区にあった木材街は、西区の西道頓堀・西長堀等の木材業者が大正6年ごろに集団移転してきたもので、業者が連合して運河・貯木場などの工事を行い、小林町・千島町一帯は西日本有数の木材市場になりました。貯木池は大正運河を中心に広がり、その周辺に製材所、合板工場、貯木場、木材市場などが混在していました。木材関係者の面積は区域の約1割を占めていましたが、戦後の大阪港復興計画による大正内港化工事により、木材関係者は昭和27年から46年にかけて、平林貯木場（現住之江区）へ移転しました。

また、大正内港化工事により、尻無川左岸に近代的な鉄鋼埠頭が完成し、大正第一突堤は、内国貿易雑貨定期船の基地、第二突堤は小型船バースとなりました。また、第一突堤北側には、内港はしけ桟橋などが整備されました。

工事で発生した土砂は、区内の臨港地区とその背後に送られ全面盛土による区画整理が施工され、市街地の近代化に貢献しました。



大阪市



⑩ 小林公園内

ひらお 平尾

平尾新田は、千島新田の南にあり、もと木津川河口の寄州でした。宝曆7年(1757年)、岡島嘉平次が新田開発の許可を受けましたが、その一部を大坂江戸堀(現西区)の平尾与左衛門が譲り受け、明和8年(1771年)検地を受けました。天保10年(1839年)発行の大坂湊口新田細見図によると、所有者は三軒家町の堺屋藤兵衛となっています。

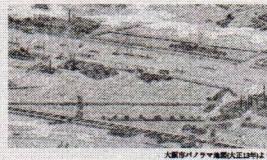
木津川は江戸時代から諸国の回船が多く集まり「木津川二十四浜」と称せられ、川口港化しておりました。各浜では諸国の大船から二十石積の上荷船等へ荷物を積み換え、市中の問屋へ運びました。二十四浜のうち大正区には、勘助島浜、三軒家浜、難波島浜、落合浜等があり、浜ごとに上荷船の所属は決まっていました。木津川口の「川口渡」は交易で賑わう大坂の街にとって不可欠なもので、大坂に入津する船から「石錢」を徴収し、「水尾渡」を度々行っていました。また、難破船救助の奨励を行っており、「シケ」の場合も高張提灯を掲げ、上荷船による救助を行えるよう手当等を与えていました。

大正時代になると木津川沿いには水運至便の地という恵まれた条件をいかして造船所が集中し、大小合わせて50社を数えました。現在でも三軒家東から船町にかけての木津川沿いには鉄鋼関係などの企業が林立しています。



大正区の花「つつじ」

大阪市



⑪ 平尾公園内

みなみおかじま 南恩加島

恩加島新田は、もと木津川河口の寄州でしたが、東成郡千林村(現旭区)の岡島嘉平次が開発を始め、文政12年(1829年)に検地を受けました。名称は当時の代官岸本武太夫の命で「岡島」を「恩加島」と換用したものです。

恩加島新田のうち、北側が「北恩加島新田」、南側が「南恩加島新田」となりました。
嘉永4年(1851年)発行の「浪華の渦ひ」によれば南恩加島を含む木津川口を挿絵入りで紹介しており、「此所は浪花の津の湊口にして諸国の海舶出入の要津にかかるゆえに、廻舟の便利よからしめんが為、去る天保3年(1832年)…870間余(1500m余)の石塘を築き…實に万代不朽にして浪花繁栄の基…又此堤は上に數株の松を植えつらねり、故に俗に木津川の千本松といふ。洋々たる滄海に築出せし松原の風景は彼の名に高き天の橋立、三保の松原なども外ならずと覺ゆ」と記されています。

嘉永7年(1854年)ロシアのブチャーチンが乗船するディアナ号が大坂に来た時は、木津川沿岸には紀州兵など2600人や43隻の番船を浮かべるなど沿岸警備が行われました。また、將軍家茂が文久3年(1863年)に大坂の海岸部を巡視した時の木津川口の守備は土佐藩が行っておりました。



大正区の花「つつじ」

大阪市



⑫ 南恩加島公園内

つるまち 鶴町

鶴町地域は、市の築港計画（明治30年～昭和3年）による埋め立てによって造成され、大正8年3月、「鶴町」「鶴浜通」「福町」という新しい町として誕生しました。

鶴町の町名は聖武天皇の「難波宮」の近くの光景を「田辺福麻呂」が詠んだ「潮干れば葦辺に駕ぐ白鶴（百鶴とも）の妻よぶ声は宮もどろに」（万葉集卷6-1064）から「鶴」を、また福町は、この詠者の「福」からとられたものです。

昭和51年の住居表示により、鶴浜通は鶴町1～4丁目に、福町は現在の鶴町5丁目となりました。

鶴町地域は運河や内港に面していることから、外資系自動車工場や日本とアメリカの間に海底ケーブルを敷設した会社や橋梁会社等の工場や倉庫が立ち並ぶ臨海工業地帯として、また職場と住宅が近接した地域として発展してきました。

鶴町には、昭和5年から11年まで中央気象台大阪支台が設置され、昭和9年の室戸台風も観測していました。

昭和25年のジェーン台風以降に港湾事業や土地区画整理事業が並行して進められ、現在のような防潮堤に囲まれた地域となっています。



大正区の花「つつじ」

大阪市

⑬ 鶴町中央公園内

おちあいかみとせんじょう
落合上渡船場

落合上渡船は、大正区千島1丁目と西成区北津守4丁目を結んでいます（岸壁間100m）。大正区側は旧町名を「新炭屋町」と言い、宝暦13年（1763年）に大坂瓦町居住の炭屋三郎兵衛によって開発された「炭屋新田」のあったところです。明治以降も鉄工所や造船所等の企業が立地するとともに、北方の三軒家方面へ道が延びていきました。

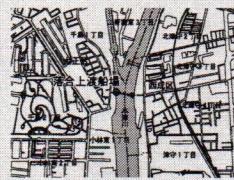
また、関西随一の木材市場を支えた「大正運河」（現在は埋立てられ千島公園の下になっています）の木津川の入口もこの渡しの南側にありました。

上流にある木津川水門（防潮）は、常時開いているが、毎月1回程度開閉試験運転のため閉められます。



大正区の花「つつじ」

大阪市



Ⓐ 落合上渡し

おちあいしもとせんじょう
落合下渡船場

大正区平尾1丁目と西成区津守2丁目を結ぶ（岸壁間138m）落合下渡船は、開設時期は明確ではないものの、天保10年（1839年）の「おおさかみなとぐちしんでんさいけんす大坂湊口新田細見図」にも「ワタシ」の表示が見えます。

対岸の「津守」には、津守新田の産土神を祀る、「津守神社」があります。津守の名称は古く「万葉集」にも見えます。

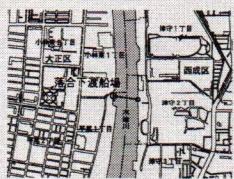
また、大正区側の「平尾」の町名は明和8年（1771年）に開発された「平尾新田」に由来します。

このあたりは、毎年10月から翌年4月にかけて、数百羽のユリカモメが飛来します。



大正区の花「つつじ」

大阪市



Ⓑ 落合下渡し

せんほんまつとせんじょう 千本松渡船場

このあたりは木津川の川尻に近く、江戸時代には「北前船」をはじめ諸国の船が盛んに出入りしました。幕府は舟運の安全のため、大阪市章のもとになった「瀬標」を数多く設置するとともに、防波堤として、天保3年(1832年)には長さ1.58kmに及ぶ大規模な石の堤が築かれました。

千本松の名の由来は、この堤防に植えられた松並木によって「摂津名所図会大成」に「洋々たる蒼海に築出せし松原の風景は彼の名に高き天橋立、三保の松原なども外ならずと覺ゆ…」とあります。

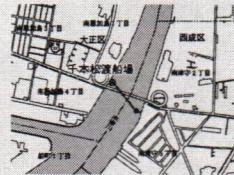
昭和48年(1973年)に千本松大橋が完成しましたが、現在も渡船は通勤通学の貴重な交通手段として、大正区南恩加島1丁目と西成区南津守2丁目を結び(岸壁間230m)運航されています。

大正区側の「南恩加島」の町名は文政12年(1829年)に開発された「南恩加島新田」に由来しています。



大正区の花「つつじ」

大阪市



④ 千本松渡し

ふなまちとせんじょう 船町渡船場

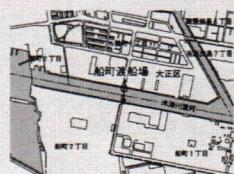
船町渡船は、大正区鶴町1丁目と同区船町1丁目を結んでいます(岸壁間75m)。この渡船がある「木津川運河」は大阪港の第1次修築工事(明治30年～昭和3年)による埋立地として「船町」「鶴町」「福町」が造成されたのと合わせて、木津川と尻無川を連絡するため昭和4年に開設されました。

昭和初期には、渡船の北岸の「鶴町」には、市電鶴町車庫や外資系の自動車工場等があり、南岸の「船町」には伊丹空港の前身である木津川飛行場や造船所等がありました。



大正区の花「つつじ」

大阪市



⑤ 船町渡し

ちとせ とせんじょう 千歳渡船場

大正内港の入口にあたる当地には弘化2年(1845年)開発の千歳新田がありました。この千歳新田と鶴町地区を結ぶ橋として千歳橋があり、市電も運行されていました。

しかし大正内港工事のため昭和32年に橋は撤去され、この渡船場が設けられました。

現在は大正区北恩加島2丁目と同区鶴町4丁目を結び(岸壁間371m)、渡船から見る大正内港と昭和山の風景は絶景です。

きた お か じま
つるまち
「北恩加島」の町名は、文政12年(1829年)に開発された「北恩加島新田」に由来するとともに、「鶴町」の町名は万葉集の歌(巻6-1064)からとられたものです。

平成15年4月には、この渡しの上を主橋梁だけでも365m、全長では1,064m、海面からの高さ28mの新「千歳橋」が完成し夕日に映える姿も美しく大正区の新たなランドマークとなっています。



大正区の花「つつじ」

大阪市



⑤ 千歳渡し (北恩加島 2 丁目側)

ちとせ とせんじょう 千歳渡船場

つるまち
鶴町地域は、大阪市の築港計画(明治30年～昭和3年)によって埋立てられ、大正8年には万葉集の歌(巻6-1064)に因み「鶴町」と名づけられました。当地と対岸にあった千歳新田(現在は大部分が大正内港となっています)を結ぶ橋として、大正11年に旧千歳橋が架けられ市電も運行されていましたが、大正内港工事のため昭和32年に橋は撤去されこの渡船場が設けられました。

渡船は大正区鶴町4丁目と同区北恩加島2丁目を結んでいます(岸壁間371m)。

鶴町側からは、多くの船が浮かぶ大正内港のかなたに、昭和山(標高33m)や千島団地等が眺められ、尻無川の広々とした河口風景ともあいまって、ウォーターフロントの美しい景観となっています。

平成15年4月には、この渡しの上を全長1,064m、海面からの高さ28mの新「千歳橋」が完成し大正区の新たなランドマークとなっています。



大正区の花「つつじ」

大阪市



⑥ 千歳渡し (鶴町側)

じんべえ とせんじょう 甚兵衛渡船場

昔、尻無川の堤は紅葉の名所でした。「摂津名所圖会大成」に、「この河の両堤に黄櫨の木を
数千株うえ…紅葉の時節にいたりては川の両岸一円の紅くれないにして川の面に映じて風景斜ならず
河下に甚兵衛の小屋とて茶店あり 年久しき茅屋にして世に名高し」とあります。この甚兵衛渡
しの小屋は「蛤小屋」と呼ばれて、名物のしじみ、はまぐりを販賣する人が絶えなかったそうです。
大正区側の「泉尾」の町名は、元禄15年(1702年)に開発された「泉尾新田」によりますが、その
名称は開発者の出身地(和泉国踞尾村)に由来しています。(現堺市津久野町)

大正区泉尾7丁目と港区福崎1丁目を結び(岸壁間94m)、朝のラッシュ時は2隻の船が運航し
ています。



大正区の花「つつじ」

大阪市



⑥ 甚兵衛渡し

きづがわ とせんじょう 木津川渡船場

大正区船町1丁目と住之江区平林北1丁目を結んでいます(岸壁間238m)。昭和30年からカーフェリーを運航し乗用車から大型トラックまで運搬し得る能力を持っていましたが、上流部に千本松大橋が開通し、今は人と自転車のみを運ぶ渡船となっています。大正区戦災復興事業によって、区内にあった木材関連施設を住吉区(現住之江区)平林へ移転することになり、これに伴い利用者の便に供するため渡船の運航を始めました。

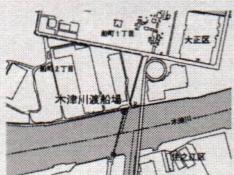
水が綺麗になったためか、渡り鳥が飛来し、毎年10月から翌年4月にかけて魚をとる姿がみられます。

なお、大正区側の「船町」の町名は難波宮賛美の歌「あり通ふ難波の宮は海近み海人をとめら
が乗れる船見ゆ」(巻6-1063)に由来しています。



大正区の花「つつじ」

大阪市



⑦ 木津川渡し

旧跡・渡船場表示板

平成17年（2005年）3月

大阪市大正区役所 区民企画室

〒551-8501 大阪市大正区千島2-7-95

TEL 06-4394-9734